

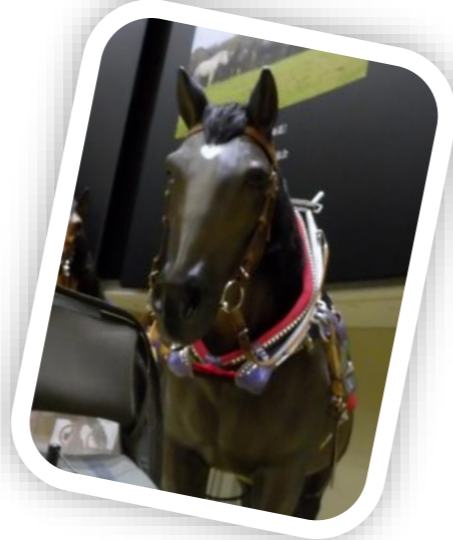
通園・春の遠足 JRA競馬博物館

通園 遠足担当

5月27日(金)、通園の「春の遠足」を実施しました。府中療育センターに統合してから初めての「春の遠足」。5月に入ってから、♪えんそくバス♪という歌も練習し、皆、期待感たっぷり！遠足の日を楽しみにしていました。

さて、当日…。前日まで大変良い天気が続いていましたが、バスに乗り込む時間になると、驚くほどの風と大雨におそわれました。それでも、大きな観光バスに乗ると、初めての体験に緊張したり、興奮したり。いつもと違う経験を楽しみながら、JRA競馬博物館に向けて出発。博物館では、大きな模型の馬に出迎えられ「こわい」とママにしがみついたり、ミニチュアの模型を興味深そうに見たり、発馬機に上ったパパママを応援したりしながら、1時間ほどの見学を終えました。お土産に記念のスタンプを押して、帰りのバスに乗る頃には、雨も上がり、「朝の雨も忘れられない良い思い出になったね」とみんな元気に、笑顔で通園に帰ってきました。

旗を振って、発走の合図



実物大!のサラブレッド

〒183-8553
東京都府中市武蔵台2-9-2
東京都立府中療育センター
電話 042(323)5115
FAX 042(322)6207

--*ホームページもご覧ください*-*-*

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/fuchuryo/index.html>

ひだまり

都立府中療育センター新聞 第534号 発行日 令和4年6月30日

令和4年度 日本重症心身障害福祉協会全国施設協議会 参加報告

院長 澁谷和彦

去る5月20日(金)に日本重症心身障害福祉協会の全国施設協議会に参加しました。昨年と同様に、新型コロナウイルス感染の流行によりオンライン形式の開催となりましたが、全国の登録136施設中129の施設から470人の参加がありました(当センターを含め東京都から8施設が参加)。

まず、厚生労働省の障害福祉担当者から行政説明がありました。2023年4月に新設される「こども家庭庁」は、“全てのこどもの健やかな成長、誰一人取り残さず、抜け落ちることのない支援”が基本理念とのことでした。これは障害者福祉の理念と同じだと感じました。「こども家庭庁」の創設が、現代の少子化や虐待児等の解決に少しでも繋がればと思います。そして、障害を持って生まれてきた全ての子どもたちが、生涯を通じて適切な支援を受けることができる。そのような体制を確立するための拠点になることを願っています。

次に、当協会の活動報告がありました。既に急性期病院では導入されている「DPCデータ提出加算の義務化」(DPC:診断名と手技等の組合せ)が、2022年の診療報酬改定により障害者施設等にも適応されることについての話でした。当協会から厚生労働省へ十分な準備期間が必要であると要望書を提出し、それにより、猶予期間が1年(200床以上の施設)または2年(200床未満の施設)になったとの説明がありました。

また、在宅ケアおよび移行医療をテーマにした講演会があり、「重症心身障害児者の多くは小児科から成人診療科への移行が困難な現状にあり、関係者の移行医療に対する理解が不可欠である。」という主旨でした。

別の話題として、新型コロナウイルス感染者を施設内で加療した場合の支援策について紹介がありました。都道府県により支援状況は異なるようです。当センターにおいても、第7波の感染拡大により転院が難しく施設内にて感染者の治療をしている状況です。何とか現状を乗り越えられるように、様々な視点からサポート体制を考えていく必要があると思います。皆様からもご意見をいただければ幸いです。

以上、協議会の報告をさせていただきます。

生活療育支援科・春の企画『お話の世界』を楽しみました！

生活療育支援科 石田泰美

5月31日(火)、6月1日(水)、2日(木)に生活支援科行事「春の企画」を行い、入所、通園、通所の利用者の皆さんが参加しました。

今年のテーマは「おはなしの世界を楽しもう」です。2つのブースを作り、1つは活動室5で「春の星のおはなし」、もう1つは多目的ホールで「注文の多い料理店」をそれぞれ体験しました。

「春の星のおはなし」では、暗くした天井にスターライトが揺らめき、たくさん小さな星の光が輝いていました。壁面には大熊座、おとめ座等の星座の形に光ったライトや、ギリシャ神話の映像があり、「今夜の府中市の夜空」がプラネタリウムのように映し出されたコーナーも設けられました。あちらこちらに光る星の世界に、利用者の皆さんは思い思いの場所に視線を向けて楽しんでいました。夜空の台紙に星型の蓄光シールを自由に貼るコーナーは、会が終わるころには「満天の星空」となりました。

一方、「注文の多い料理店」は、物語を体験していきます。入り口で犬の風船をお供にもらい、山に狩りに行くと、雷にあって迷子になったところへ、西洋料理山猫軒というレストラン。入ってみると「おしぼりで手や顔を拭いてください」「クリームを塗ってください」などと注文され、進んでいきます。美味しいご飯を食べるつもりが、とうとう最後は巨大なヤマネコのおなかの中へ…。猫のしっぽに触るとお供の犬が吠え、「犬のおまわりさん」の曲に、ヤマネコが逃げ出して助かる、というオチで終わります。いろいろな感覚



に働きかける仕掛けに、場面場面の雰囲気を楽しんだり「次は何だろう」と期待している利用者の表情が見られました。中には、ヤマネコのおなかの中には怖くては入れない方も。

新型コロナ感染予防対策でなかなか以前のような企画はできませんが、利用者の皆さんに、日常とはちょっと違う雰囲気を味わってもらおうひと時となりました。

今後も生活の潤いとなるような楽しい行事を作っていきたいと思っております。



第125回 日本小児科学会学術集会 参加報告

小児科医長 栗原亜紀

今年の日本小児科学会は、福島県立医科大学小児科の主催により福島県郡山市で開催されました。コロナ禍のため、現地とオンラインとのハイブリッド開催となりました。2022年4月15日から17日まで、興味深い演題満載で行われましたが、オンデマンドは4月19日から5月31日まで配信され、オンデマンドを利用された先生方も多かったようです。

COVID-19、再生医療、腸内細菌叢と免疫、こどもの終末期医療、こどもの自殺、こどもの貧困、医療的ケアなど様々なシンポジウムはどれも内容が充実しており、大変勉強になりました。私は口演発表があるので現地に出向く予定でしたが、余震の影響で新幹線の予約が取れず、急遽オンライン参加とさせていただきました。WEB配信ですと、自宅に居ながらにして会場を駆け足で移動する必要も無く、次々と拝聴できることもあり、大変便利に感じました。

今年は、福島県立医科大学の細矢光亮教授が会頭を務められ、2011年3月11日の東日本大震災後はじめての東北地区における開催でした。巨大地震と津波による大きな被害に加え、原子力発電所の事故による我が国でこれまで経験の無い規模の原子力災害を被られた地域です。特別講演やシンポジウム、演題に渡り、震災と原発事故後の復興と医療、振り返りとこれからの課題に焦点が当たっていました。「走りながら考え、立ち止まることなく実行する日々が続いた」という細矢教授のお言葉に、あらためて厳しい状況と激務の月日を拝察しました。

私自身は一昨年度まで10年と少し非常勤で外来診療を担当致しました多摩北部医療センターから、「地域中核病院での発達障害の診療と支援」という演題を、日本小児神経学会における発表の続報として統計的解析を加えて報告致しました。都内でもまだ発達センターを持たない自治体もあり、そんな地域での発達外来の現状、診療経過をWISC4で追った結果、卒業して診療終了できた患者様の増加、最後に発達に心配のある患者様たちが都内に予約待ちであふれている混乱をどうしたら解決していけるかの提言、といった内容で盛り盛りでした。自治体や地域の先生方と連携協力させていただき、当センターの診療経過についても評価しながら、都民のニーズを適切に把握し発達障害診療の発展に寄与できたらと思っております。

発表演題資料から～統計的解析結果～

考察 ① こどもたちは変わる

WISC4		経時変化	検定結果
FIQ	全検査IQ	+5.06	P<0.05
VCI	言語理解	+5.60	P<0.05
PRI	知覚推理	+3.88	P<0.05
WMI	ワーキングメモリー	+6.06	P<0.05
PSI	処理速度	-0.95	P>0.05

